

## 11. 分担研究報告書

厚生労働科学研究費補助金（B型肝炎創薬実用化研究事業）  
（分担）研究報告書

iPS細胞からの肝細胞の誘導と移植法の確立

研究分担者 山村 研一 熊本大学生命資源研究・支援センター 教授  
研究協力者 李 正花 熊本大学生命資源研究・支援センター 助教  
研究協力者 白木 伸明 熊本大学発生医学研究所 助教  
研究協力者 アーマッド マザヘリー 熊本大学生命資源研究・支援センター 研究員

研究要旨

iPS細胞からの肝細胞誘導法は、種々の方法が発表され、かなり確立されている。しかし、通常4週間かかり、必ずしも本プロジェクトの実施のための方法が完成しているとは言えない。特に、生体への移植を考える時、誘導に要する時間を短縮することは極めて重要と考えられる。一方、肝臓ヒト化マウスを作製する上で、ヒト肝細胞を免疫反応が正常なマウスに移植する方法の確立は極めて重要である。上記の方法論の開発を試み、約2週間で肝細胞を誘導する方法、また、胎児卵黄嚢血管からヒト肝細胞を移植する方法を確立することに成功した。

A．研究目的

HBV 肝疾患の病態解明と治療法の確立を目指すために、HBV が感染可能で、かつ、免疫応答により肝炎が引き起こされるマウスモデルの開発を目標とする。そのために、ヒト iPS 細胞から肝細胞を迅速に分化誘導する方法の確立と、ヒトの免疫系を持つマウスに拒絶されないようヒト肝細胞を移植する方法を確立することが目的である。

B．研究方法

M15細胞をフィーダー細胞として用い、最初に activin を10日間作用させ、その後、dexamethadone、HGF を加え培養することで、iPS細胞から肝細胞の分化誘導系はこれまでに確立している。一方、マウスに移植することを考慮すれば、フィーダー細胞を用いない方法が望まれる。そこで、Hannanらの論文を（Nature Protocols 8:430-437, 2013）を参考に、培養期間をより短縮する方法の開発を試みた。

一方、肝細胞を移植するより良い方法を開発することを目指し、胎児期に肝細胞を移植する方法を検討している。前年度までに、マウスメラノーマ細胞を用いて胎児の卵黄静脈に移植する方法を確立しているので、マウス正常肝細胞を用いた移植法を確立することを目的とした。

（倫理面への配慮）

本研究の範囲では必要としない。

C．研究結果

培養開始の初期には glucose 濃度を 4500mg と高く設定することで、iPS細胞の増殖を促進できること、内胚葉系への分化誘導には Dexamethazone と HGF を用いること、最後の肝細胞系への分化誘導では Oncostatin M を用いることで、分化効率がよくしかも通常4週を要するところ14-16日間程度で肝細胞を誘導する方法を確立した。

上記の培養では、Endoderm系、Definitive endoderm系、Hepatoblast/hepatocyte系への分化段階で、培地を変更する必要があるが、従来は免疫染色を用いてそれぞれの分化マーカーを検出し、培地を変える必要があった。この方法は、そのための培養ディッシュを用意する必要があり、手間がかかっていた。Cerberus1 (Cer1)は、anterior visceral endodermで発現し、その後definitive endodermで発現し分泌されるタンパクである。この分泌されるCER1の量が、SOX17やFOXA2陽性細胞と比例することを見いだした。したがって、この陽性細胞の培養液中への出現をマーカーとして、培地の交換の時期を決定できるこ

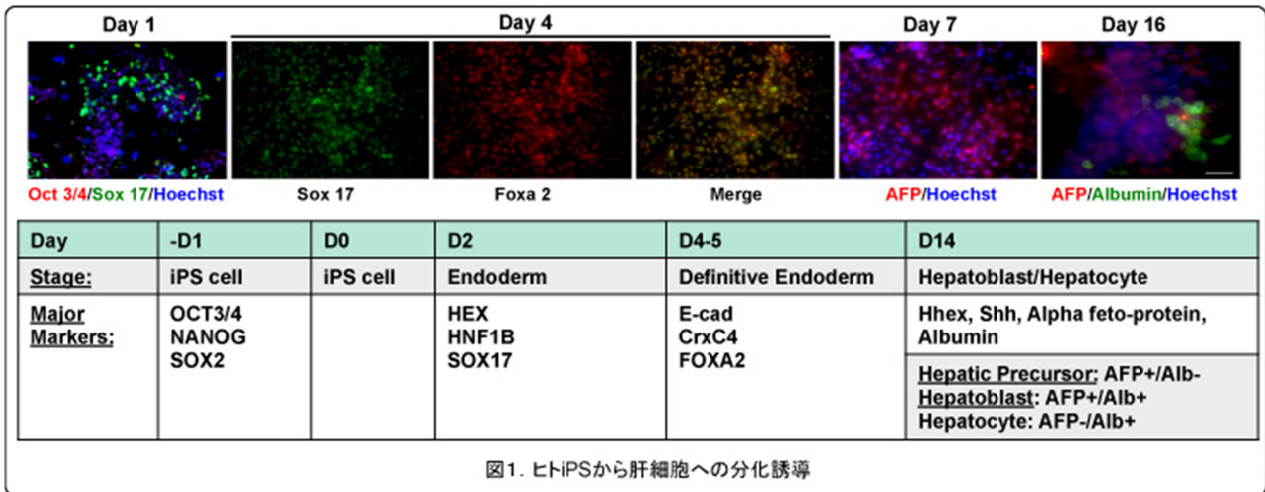


図1. ヒトiPSから肝細胞への分化誘導

とが期待される。そこで、この Cer1 を ELISA で測定する方法を確立した。

一方、樹立されている iPS 細胞は必ずしも均一の性質を持つものではなく、line によって分化誘導の効率はかなり異なり、3つの cell line をテストした範囲では HiPSclone2A が良かった。移植実験に用いる際には、これを用いる予定である。また、患者由来の iPS 細胞においても、分化誘導効率が異なること、しかし、少なくとも3つの cell line を樹立すれば、増殖及び分化誘導効率のよいクローンが得られることを明らかにした。

全身に EGFP を発現するトランスジェニックマウス Tg(CAG-EGIP:CAG-EGFP-IRES-PURO)から初代肝細胞を単離し、胎生期の 16.5 日目頃に胎児の卵黄囊血管経由で肝細胞移植を試みた(図2)。移植を受けたマウスを生後 8 日目で肝臓を解析したところ、おおよそ 10~50%のキメラ率で、EGFP を発現する肝細胞が生着していた。すなわち、遺伝子や腫瘍細胞のみならず、成熟した正常肝細胞も胎仔肝に移入し生着・増殖することが確認された。

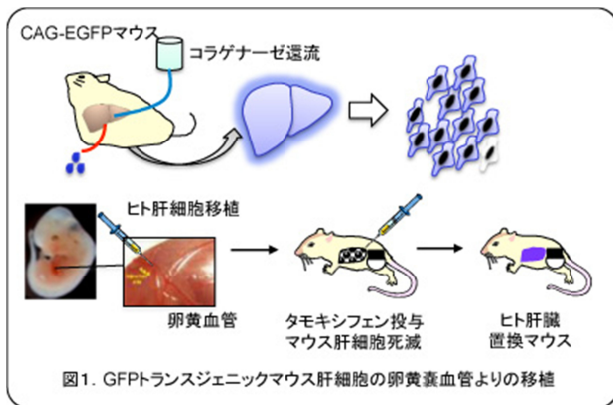


図1. GFPトランスジェニックマウス肝細胞の卵黄囊血管よりの移植

#### D . 考察

ヒト iPS 細胞を用いて肝細胞の分化誘導法をほぼ確立した。過去の報告と異なり、培養初期の段階で、グルコース濃度を高く設定することが、iPS 細胞の生存率を向上させるうえで重要であることを明らかにした。

また、胎生 16.5 日の胎児の卵黄囊血管から、ヒト肝細胞を移植する方法を確立した。この時期に移植すれば、免疫寛容となることが期待され、マウスの免疫能を保ったまま肝臓ヒト化マウスを作製できる可能性が高まった。今後は、ヒト肝細胞の移植時期とタモキシフェンの投与時期を検討する予定である。

#### E . 結論

iPS 細胞から、約 2 週間で肝細胞を分化誘導する方法を確立した。また、胎児卵黄囊血管にヒト肝細胞を移植する方法も確立した。

#### F . 健康危険情報

該当なし

#### G . 研究発表

##### 1. 論文発表

(発表誌名巻号・頁・発行年等も記入)

- Iwashita H., Shiraki N., Sakano D., Shiga M., Sasamoto K, Kume K., and Kume S. Secreted Cerberus1 as a marker for quantification of definitive endoderm differentiation of pluripotent stem cells. PLoS ONE (2013) 8(5): e64291. (doi:10.1371/journal.pone.0064291)

2. 山添太士・白木伸明・佐々木裕・桑 昭苑、  
肝臓の再生医療、日本医師会雑誌 142 (4)  
791-795, 2013

2. 学会発表

1. 山村研一: 「再生医療における非臨床試験とは: ヒト iPS 細胞を用いたヒト化マウス」, 第 22 回熊本大学医学部附属病院 臨床カンファレンス, 2013.5.13, 熊本 (熊本大学)
2. 白木伸明: ES/iPS 細胞から内胚葉組織への分化における細胞外環境の役割. 第 130 回熊本小児科学会 2013.6.16 (熊本)
3. 山村研一, 牟彦双, 李正花: FAP のダブルヒト化モデルマウスによる前臨床実験, 日本人類遺伝学会第 58 回大会, 宮城 (江陽グランドホテル), 2013.11.20-11.23.

4. Li, Z., Mu, S., Shen, J., Araki, K. and Yamamura, K. Improvement of retinal function and vitamin A availability in humanized mice at retinol-binding protein locus. 第 36 回日本分子生物学会、2013 年 12 月 3 日-6 日、神戸

H. 知的財産権の出願・登録状況  
(予定を含む。)

1. 特許取得  
なし
2. 実用新案登録  
なし
3. その他  
なし

厚生労働科学研究費補助金（B型肝炎創薬実用化研究事業）  
（分担）研究報告書

E S 細胞の樹立とモデルマウスの作製

研究分担者 荒木 喜美 熊本大学生命資源研究・支援センター 准教授  
研究協力者 松本 健 熊本大学生命資源研究・支援センター 研究員  
研究協力者 仁木 大輔 熊本大学生命資源研究・支援センター 研究員

研究要旨

B型肝炎ウイルスの感染・肝炎発症のモデルマウス作製のため、免疫系をヒト化したマウス、ヒトHLA Class Iと $\beta 2$ -microglobulinを発現し、かつマウスのClass Iと $\beta 2$ -microglobulinを欠損しているマウス [Tg(h $\beta 2$ m-HLA-A2.1( $\alpha 1$ - $\alpha 2$ )-H2-D<sup>b</sup>( $\alpha 3$ ));H2-D<sup>b</sup><sup>-/-</sup>;B2m<sup>-/-</sup>、略称HHB]を用いた。このHHBマウスからES細胞 (ES HHB)を樹立し、生殖系列キメラ作製能を確認した。マウス肝臓を欠失するマウスを樹立するため、Hhex遺伝子を破壊したES HHB:Hhex<sup>-/-</sup>を樹立した。ES HHBに肝障害を誘導するコンストラクト、SAP-CreER<sup>T2</sup>と CAG-loxP-EGFP-loxP-DT-Aを導入し、キメラマウスを作製した。少なくとも6ラインから生殖系列に伝達することを確認し、得られたF1マウスにタモキシフェン投与を行ったところ、ASTの上昇が確認され、肝障害が誘導されていると考えられた。また、肝障害を起こす系として既に実用化されているFah遺伝子欠損系をこのマウス系統で確立するため、CRISPR/Cas9を用いて、Fah遺伝子破壊を行った。

A．研究目的

HBV 肝疾患の病態解明と治療法の確立を目指すために、HBV が感染可能で、かつ、免疫応答により肝炎が引き起こされるマウスモデルの開発を目標とする。そのために、免疫系をヒト化したマウスを用い、ヒト肝臓置換マウスのレシピエントとなりうる薬剤誘導性に肝障害を誘導できるマウス作製を行うことが目的である。

B．研究方法

免疫系をヒト化したマウスとして、マウス内在性のMHCを欠損し、かつ、ヒトMHCの $\beta 2$ m及びHLA-A2.1の $\alpha 1$ □ $\alpha 2$ と、マウスMHC H2-D<sup>b</sup>の $\alpha 3$  domainを融合した遺伝子(HHD遺伝子)を発現しているHHBマウスを用いる。このマウスからES細胞(ES HHB)を樹立し、キメラマウスを作製することで、生殖系列キメラの作出能の高いES株を選択する。

さらに、このマウスにおいて、マウス肝臓を欠失させるため、マウスHhex遺伝子を欠損させたES(ES HHB:Hhex<sup>-/-</sup>)をCRISPR/Cas9法により樹立する。

マウス肝細胞をタモキシフェン誘導的に死滅

させることを可能にするため、肝臓で部位特異的組換え遺伝子を発現させるコンストラクトSAP-CreER<sup>T2</sup>と、組換えにより細胞死を誘導するコンストラクトCAG-loxP-EGFP-loxP-DT-Aを導入する。得られたクローンからキメラマウスを作製し、ラインを樹立、期待通りに肝障害を誘導できるか検証する。

(倫理面への配慮)

本研究の範囲では必要としない。

C．研究結果

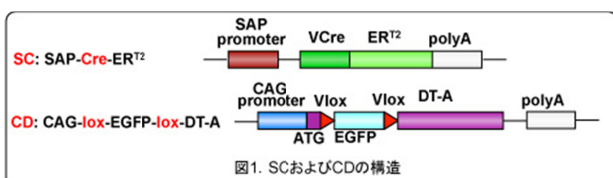
HHBマウスを用いて体外受精を行い、得られた33個のプラストシストを用いてES細胞株樹立を行った。2i (2 □M PD0325901、3 □M CHIR99021)存在下で培養、内部細胞塊の増殖が見られた28クローンを植え継ぎ、21クローンの樹立に成功した。うち9クローンは形態が良くなかったため、12クローンについてキメラマウス作製能を検討した。ICRの8細胞期胚との凝集法でキメラマウスを作製、2-3匹の仮親に移植した。キメラマウス作製成績を下に示す。

ライン	移植胚数	出産仔数	100%キメラ数
2	75	3	2
3	75	12	6
4	75	8	4
5	50	0	0
6	75	5	3
7	75	3	3
8	50	3	0
9	75	14	9
10	75	16	11
11	75	11	8
12	75	2	0
13	75	0	0

5匹以上の100%オスキメラが得られた3クローン(HHB3, 9, 10)について、継代後のキメラ作製能について検討したところ、いずれのクローンからも100%オスキメラが得られた。キメラ作製効率の良かった9と10を今後の遺伝子導入に使用することとした。

肝臓を欠失したマウスを樹立するため、ES HHBを用いて、マウス Hhex 遺伝子の破壊を試みた。ATG のすぐ下流に target site を設定し sgRNA を構築、pX330 ベクターに組入れてベクターを作製した。ES HHB10 に導入し、36 個のネオ耐性クローンを選別した。これらのクローンについて、5'側、および 3'側それぞれでスクリーニングしたところ、合計 27 個のクローンで破壊を確認した。破壊頻度は 75%であり、極めて効率よく Hhex 遺伝子を破壊できることが明らかとなった。

肝細胞を欠失させるためのコンストラクト、SAP-CreER<sup>T2</sup>(SC)と CAG-loxP-EGFP-loxP-DT-A(CD) (図1) 及び薬剤選択のための PGK-Puro を樹立



した ES HHB9 と ES HHB10 細胞にエレクトロポレーションで導入した。ピューロマイシン選択後、得られたコロニーを 120 個単離し、ストック作製

後、一部を植え継ぎ、EGFP 蛍光観察した後に DNA を抽出した。EGFP 蛍光、DT-A の pA signal 検出 PCR、SAP のプロモーター部検出 PCR の全てが陽性であったものは 26 クローン(21.7%)であった。サザンブロットによる解析で選択した 11 クローンでキメラマウス作製を行い、そのうち 6 系統を C57BL/6 と交配し、生殖系列伝達を確認した。得られた F1 にタモキシフェンを投与したところ、AST の上昇が見られたので、この SCCD コンストラクトは期待通り働いていると考えられた。

#### D. 考察

HHB マウスからの ES 細胞樹立は、2i の添加を必要としたものの、順調に行うことが出来た。SCCD コンストラクトの導入後のクローンにおいても生殖系列キメラを得ることが出来たため、十分実用化可能と考えられる。この ES 細胞株は、肝炎モデルだけでなく、他のヒト化免疫系が必要な系においても有用と期待される。

また、CRISPR/Cas9 を用いた遺伝子破壊にも成功したので、今後行う遺伝子操作にも CRISPR/Cas9 を用いて行きたい。

肝障害の誘導は、まだ少数のマウスで試している段階であるが、劇症肝炎で死亡してしまうケースも多く、相当の高率でヒト肝細胞で置換した肝臓を持つマウスが得られる可能性が高いことが示唆された。今後、投与回数や間隔などの詳細な条件検討を行なう予定である。

#### E. 結論

HHB マウスからの ES 細胞樹立は計画通りに達成した。樹立した細胞はエレクトロポレーション・コロニー単離という操作後も生殖系列キメラを作出できる能力を有している。さらに、肝細胞を欠失させるためのコンストラクト、SAP-CreER<sup>T2</sup> と CAG-loxP-EGFP-loxP-DT-A を導入した ES 細胞とそれを用いたマウス系統の樹立に成功した。

#### F. 健康危険情報

該当なし

#### G. 研究発表

## 1. 論文発表

(発表誌名巻号・頁・発行年等も記入)

Sakano, D., Shiraki, N., Kikawa, K., Yamazoe, T., Kataoka, M., Umeda, K., Araki, K., Mao, D., Matsumoto, S., Nakagata, N., Andersson, O., Stainier, D., Endo, F., Kume, K., Uesugi, M. and Kume, S. VMAT2 identified as a regulator of late-stage beta cell differentiation. Nat. Chem. Biol. 10: 141-148. 2014.

## 2. 学会発表

Li, Z., Mu, Y., Shen, J., Araki, K., Yamamura, K.: Improvement of retinal function and vitamin A

availability in humanized mice at retinol-binding protein locus, 第36回日本分子生物学会年会, 2013.12.3-12.6, 兵庫(神戸ポートアイランド)

H. 知的財産権の出願・登録状況  
(予定を含む。)

1. 特許取得  
なし
2. 実用新案登録  
なし
3. その他  
なし

厚生労働科学研究費補助金（B型肝炎創薬実用化研究事業）  
（分担）研究報告書

チンパンジーの末梢血液細胞からの iPS 細胞の樹立

研究分担者 江良 択実 熊本大学発生医学研究所 教授  
研究協力者 明里 宏文 京都大学霊長類研究所 教授

研究要旨

人工多能性幹細胞（iPS 細胞）は、皮膚由来線維芽細胞や末梢血液細胞に 4 つの初期化因子(Sox2, KLF4, Oct3/4, cMyc)を発現させることで容易に作製できる。この細胞は試験管内で容易に増幅可能であり、さまざまな細胞を作り出す能力を有する。加えて、マウス iPS 細胞の場合、胚への移植によってすべての組織に分化することができる。本研究では、キメラマウスの中で肝臓細胞をチンパンジー細胞へ置換し B 型肝炎モデルを樹立することを全体の目的とする。この全体の目的達成のために本分担研究では、チンパンジー由来 iPS (ciPS) 細胞を樹立する。樹立には、国内で開発されたセンダイウイルスベクターを用いる。この方法では、iPS 細胞作製に用いる初期化因子が染色体に組み込まれないために、外来因子に依存しない iPS 細胞を作製できる。平成 25 年度は、チンパンジーの血液細胞からさらに 2 ラインの ciPS 細胞の樹立に成功した。これらの ciPS 細胞について、幹細胞マーカーが発現していること、試験管内での分化誘導方法および免疫不全マウスでの奇形腫形成方法により 3 胚葉への多分化能を有すること、核型は正常で PCR 解析等を通して確かにチンパンジー由来であることを明らかにした。

A. 研究目的

B 型肝炎ウイルス (HBV) 保有者は国内に 150 万人程度と言われ、5-10%が肝炎を発症し、肝硬変、肝癌に進行する。インターフェロンの投与での中和抗体獲得例が全例ではないこと、核酸アナログ製剤の長期投与後に薬剤耐性ウイルスの出現と肝炎の再燃が起こること、が問題となっている。かかる状況において、HBV 肝疾患の病態の解明と新規治療法の確立を目指すために、HBV 感染可能な小動物（マウス等）特に免疫応答が正常な感染マウスモデルの開発が必要である。

本研究では、HBV が感染可能で正常の免疫応答を持つマウスを作成することを全体の目的とする。HBV はヒト以外ではチンパンジーに感染する。そこで、マウスの中で肝臓細胞をチンパンジー細胞へ免疫状態が正常な状態で置換できれば、HBV 感染可能で正常な免疫応答を持つマウスを作成することができる。

一方、人工多能性幹細胞（iPS 細胞）は、皮膚由来線維芽細胞や末梢血液細胞に 4 つの初期化因子(Sox2, KLF4, Oct3/4, cMyc)を発現させて作製する。この細胞は試験管内で容易に増幅可能であ

り、さまざまな細胞を誘導し作り出すことができる。加えて、マウス iPS 細胞の場合、胚への移植後、体内すべての組織へ分化することができる。そこでチンパンジーから iPS 細胞を樹立し、肝臓欠失マウスとのキメラマウスを作成すれば、肝臓細胞をチンパンジー細胞へ置換したマウスが作成可能であることが予想される。平成 25 年度はチンパンジーの血液細胞から人工多能性幹細胞 (ciPS 細胞)を作成する。樹立には、国内で開発されたセンダイウイルスベクター (SeV ベクター)を用いる。この方法では、iPS 細胞作製に用いる初期化因子が染色体に組み込まれないために、外来因子に依存しない iPS 細胞を作製できる。

B.研究方法

1. iPS 細胞樹立のためのチンパンジー血液の採取とリンパ球刺激

チンパンジーの末梢血液からフィコールの比重遠心法を用いて単核球を分離する。この単核球を、ヒト同様、IL-2 と抗 CD3 抗体にて 5 日間試験管内にて刺激し、活性化した T リンパ球を得る。

チンパンジーの末梢血液は、研究協力者の京都



大霊長類研究所の明里教授の協力のもと、健康診断時採取された余剰血液を用いる。

## 2. SeV ベクターを使った ciPS 細胞の樹立

SeV ベクターによって患者由来線維芽細胞へ初期因子 (Oct3/4, Sox2, KLF4, c-Myc) を一過性に発現させ ciPS 細胞の樹立を行う。

樹立した ciPS 細胞については、1)アルカリフォスファターゼ染色 2)Nanog, Oct3/4, SSEA-4, TRA-1-60の免疫染色による iPS 細胞の確認を行う。さらに、未分化マーカーの発現を PCR にて確認する。これらで ciPS 細胞に矛盾ないデータが得られたら、染色体検査を行い、正常核型であること、またチンパンジー由来であることを確認する。加えて、T リンパ球受容体の遺伝子の再構成をサザンブロット法にて確認し ciPS 細胞がチンパンジーの T リンパ球由来であることを確認する。

## 3. 樹立した ciPS 細胞の多分化能の確認

樹立した ciPS 細胞を、試験管内にて、神経外胚葉様細胞、中胚葉様細胞、内胚葉様細胞への分化を誘導する。また免疫不全マウス(NOD-Scid)へ移植し奇形種を形成させ、多分化能を調べる。

## 4. 樹立した ciPS 細胞への遺伝子導入

樹立した ciPS 細胞へ HHD (ヒト MHC の $\beta 2m$  及び HLA-A2.1 の $\alpha 1$ □ $\alpha 2$  と、マウス MHC H2-D<sup>b</sup> の $\alpha 3$  domain を融合した遺伝子)を導入。導入後ハイグロマイシンによるセレクションを開始。使う薬剤の濃度決定を行うために様々な濃度で iPS 細胞の維持培養を行う。

## 5. 樹立した iPS 細胞のナイーブ化

ヒトおよび ciPS 細胞から in vivo にて効率よく様々な組織を構築するには、これらの iPS 細胞をよりマウス ES 細胞の状態に近づけることが必要である。この作業をナイーブ化と呼ぶ。平成 25 年度に発表された方法(Nature, 504: 282-286, 2013)を用いてナイーブ化を行う。

(倫理面への配慮)

### 1) 倫理審査等

血液細胞からヒト由来 iPS 細胞作製とその解析については倫理委員会ですでに承認済みである。ヒト血液細胞の採取は同意のもと健康人ボランティア 1 名から行う。一般診療に用いられる方法で上腕より 10ml ヘパリン加採血を行う。したがって危険はない。iPS 細胞作製にあたり、チンパ

ンジーからのサンプルは、愛知県犬山市にある京都大学霊長類研究所に飼育中のチンパンジーから、健康診断で行う採血の余剰血液を用いる。研究所内での共同研究申請を行い承認のもと行っている。

### 2) 人権擁護上の配慮

本研究は、個人ゲノムそのものの情報を得るわけではない。また、研究の成果を学術雑誌に投稿することや、学会等で発表する場合、個人が特定される個人情報公表されることはない。血液細胞、作製した iPS 細胞は所属機関において施錠できる研究室にて管理し、一般の人々やこの研究に関係ない他の研究者の目に触れることはない。したがって、iPS 細胞から個人の特定の情報につながることはない。また、ヒト iPS 細胞から個体を作製すること、ヒト胚への導入、ヒト胎児への導入、生殖細胞の作製は、行わない。

### 3) 不利益・危険性の排除や説明と同意

サンプル採取には、研究目的・予想される成果、患者情報の保護、予想される不利益等を同意書に記述している内容に準じて、担当医からの十分な説明の後(必要であれば代表申請者も同席して)同意(インフォームド・コンセント)を得て行う。

本研究による成果が知的財産権の対象になる場合もあるが、提供者に権利が帰属したり、利潤を得ることはない。サンプル提供者にご負担していただく必要経費はなく、また、サンプル提供による謝金・交通費の支給もない。研究にかかる費用については、研究費から支出する。

## C. 研究結果

### 1. iPS 細胞樹立のためのチンパンジー血液の採取とリンパ球刺激

血液は、研究協力者の京都大霊長類研究所の明里教授の協力のもとチンパンジー 2 個体から健康診断時に採血した。フィコールを用いて分離した単核球をヒトと同様に IL-2 と抗 CD3 抗体にて刺激し、活性化した T リンパ球を後の iPS 細胞誘導に用いた。

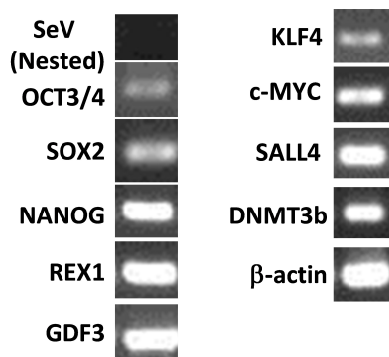
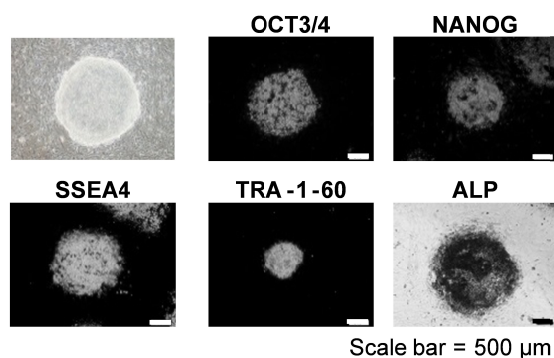
### 2. チンパンジーの血液細胞由来 ciPS 細胞の樹立

チンパンジーから末梢血液を採取し上述した作業に従い刺激した T リンパ球より、ciPS 細胞誘導を行った。iPS 細胞作製には初期化因子(Oct3/4,

Sox2, KLF4, c-Myc)を持つ非組込型センダイ・ウイルスベクター(SeV)を用いた。このベクターは染色体に組み込まれることなく、細胞質内で遺伝子を発現することができる。チンパンジーのTリンパ球株にてセンダイウイルスが感染することは確認済みである。しかし、残念なことに、1個体目ではコロニーがほとんどなく、1クローンのみ樹立できた。原因は、抗CD3抗体での刺激が強すぎて細胞状態が悪化したためと考えられた。別の刺激方法にてiPS細胞誘導が可能か、まずヒト血液細胞を用いてPHAとConA刺激を行ったところ、これまでと同様の効率でiPS細胞コロニーを樹立することができた。そこで、チンパンジー2個体目では1) ConA刺激に変更2) FGF2の濃度を30ng/mlへ変更(他のサルでの樹立に高濃度を使っていたため)3) ウイルスの力価をMOI:10からMOI:30へ上昇等の変更を行った。その結果、多くのiPS細胞コロニーを認めた。平成25年度はこの方法にて、さらに3クローンのiPS細胞を得た。これで合計単離したiPS細胞コロニーを増幅し、SeVウイルス除去と未分化マーカーの発現を免疫染色、RT-PCRで調べ、その発現を確認した(図1)。

次に平成25年度に新たに作製したiPS細胞がチンパンジー由来の細胞であることをヒトとチン

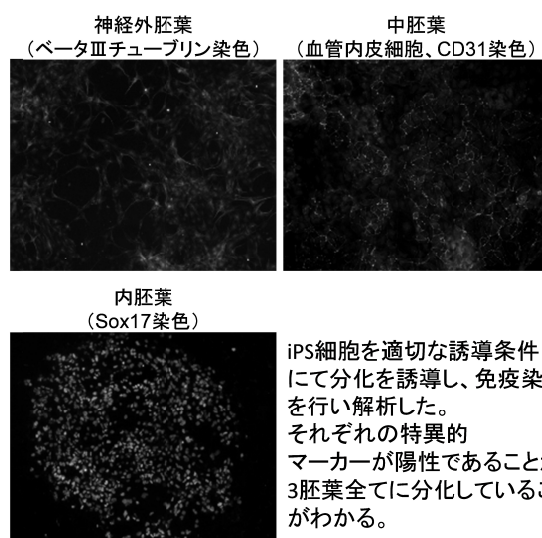
図1 新たに樹立したチンパンジー由来iPS細胞



パンジーで長さに違いある遺伝子をPCRにて増幅することで確認した。加えて、染色体検査にて正常核型であること、チンパンジーであることを確認した。また、Tリンパ球由来のiPS細胞であることを、iPS細胞のTリンパ球受容体遺伝子再構成の有無を調べ、確認した。

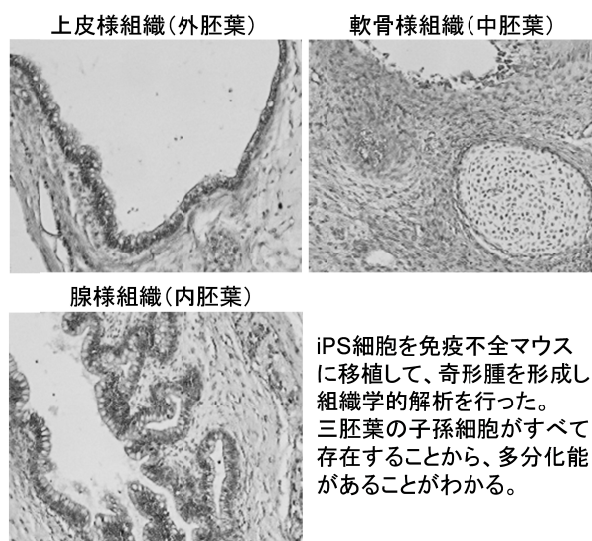
多分化能を見るために、試験管内分化誘導と奇形腫形成を行った。平成24, 25年度に作製したiPS細胞はすべて試験管内で神経外胚葉、中胚葉、内胚葉系列の細胞へと適切な誘導条件下にて分化した(図2)。

図2 iPS細胞の試験管内分化誘導



また免疫不全マウスの精巣へ移植して作製した奇形腫解析でも、外胚葉、中胚葉、内胚葉系列の細胞への分化能力を持つことを確認した(図3)。次に、樹立したチンパンジーiPS細胞へヒトHHD

図3 奇形腫解析による多分化能の証明



遺伝子を導入するにあたり、使うハイグロマイシンによる薬剤の濃度決定を行った。その結果、1 $\mu$ g/ml以上の濃度ではiPS細胞が生存できないことがわかった。様々な現在導入方法の検討を行いどの方法が有効かを検討中である。

ヒトおよびチンパンジーのiPS細胞から生体内にて効率よく様々な組織を構築する、すなわちキメラ効率を上げるためには、これらのiPS細胞をよりマウスES細胞の状態に近づける、いわゆるナイーブ化が必要である。現在平成25年度に発表された方法(Nature, 504:282-286, 2013)を行っているが、今のところ成功していない。引き続き行うと同時に他の方法についても検討を随時行っていく。

#### D. 考察

チンパンジー2 個体より末梢血液を採取し、Tリンパ球を刺激後、iPS細胞樹立を行った。平成24年度に確立したConAを用いる方法に切り替えてリンパ球刺激を行うことで新たに2ラインの樹立に成功した。これらのiPS細胞を試験管内にて分化誘導を行い三胚葉系列の細胞へと誘導することができた。この時に用いた方法はヒトで使われている方法であり、用いたマーカーの抗体もヒト分子を認識するものであるが、チンパンジーにもうまく反応させることができた。抗体の認識するエピトープがヒトとチンパンジーで類似しているためと考えられる。本研究では、末梢血液細胞よりiPS細胞の樹立に成功したが、このように皮膚生検が難しい動物からのiPS細胞樹立には容易に行える血液からのiPS細胞誘導は有効である。

#### E. 結論

新たにチンパンジーの末梢Tリンパ球から2ラ

インiPS細胞を樹立した。樹立したiPS細胞は形態的にも、また、未分化マーカーの発現でもiPS細胞に矛盾することがなかった。Tリンパ球受容体遺伝子サザンプロット解析からこのiPS細胞はTリンパ球由来であり、染色体検査あるいは遺伝子解析よりチンパンジー細胞由来であることが確認された。したがって、チンパンジー由来のiPS細胞が樹立されたと言える。さらに、試験管内での分化誘導、免疫不全マウスに移植し形成した奇形腫解析から作製したiPS細胞は多分化能を持つことが証明された。

#### F. 健康危険情報

該当なし。

#### G. 研究発表

(発表雑誌名巻号・頁・発行年なども記入)

1. 論文発表  
特になし
2. 学会発表
  1. 江良択実 難治性疾患由来iPS細胞の樹立、解析とそのバンク化 第130回熊本小児科学会2013年6月16日 熊本
  2. 江良択実 iPS細胞と再生医療 第14回医薬品等ウイルス安全性シンポジウム 2013年9月28日 東京

#### H. 知的所有権の取得状況(予定を含む)

1. 特許取得  
特になし。
2. 実用新案登録  
特になし。
3. その他  
特になし。

厚生労働科学研究費補助金(B型肝炎創薬実用化等研究事業)  
(分担)研究報告書

肝炎発症メカニズムの解析

研究分担者 佐々木 裕 熊本大学大学院生命科学研究部消化器内科学分野 教授  
研究協力者 渡邊 丈久 熊本大学大学院生命科学研究部消化器内科学分野 助教  
研究協力者 直江 秀昭 熊本大学大学院生命科学研究部消化器内科学分野 助教

研究要旨

B型肝炎ウイルス(HBV)はヒトとチンパンジーにしか感染せず、慢性化のメカニズムや治療法の開発が困難であった。また HBV 既感染患者は免疫抑制時に肝炎を発症することがあり(*de novo*肝炎)、近年その病態が注目されている。本研究では HBV が感染し、かつ免疫応答により肝炎が発症するキメラマウスモデルを確立し、B型肝炎ウイルス(HBV)の慢性化や *de novo*肝炎発症のメカニズム、治療法の開発に貢献する。キメラマウスを用いた HBV 感染による肝炎発症実験においては B型肝炎ウイルス抗原、抗体などの各種血清学的検査、および炎症マーカーを利用して感染の成立および肝炎の発症を判定する必要があるが、それらの測定法を確立した。

A. 研究目的

B型肝炎は肝炎、肝癌の主要な原因の1つであるが、HBV感染の慢性化のメカニズムなど、その病態は未だに解明されない部分が多い。なかでも HBV 既感染患者に免疫抑制時に肝炎を発症する *de novo*肝炎については研究が進んでいない。解析に必要な実験動物が不在であったことがその理由の一つである。*de novo*肝炎は、B型急性肝炎治療後に肝細胞内に存在する HBV-covalently closed circular DNA(cccDNA)がその原因と考えられている。

HBVの肝細胞内の生活環では HBV粒子は感染後に不完全2重鎖である HBV-Relaxed circular DNA(rcDNA)から完全2重鎖の HBV-cccDNAに変換される。そこからウイルス粒子の構成蛋白質をコードする mRNA が

転写され、逆転写により複製された HBV-rcDNAとともにHBウイルス粒子を形成する。このHBV-cccDNAからの転写活性が低ければ肝炎は顕在化しないと考えられる。免疫抑制状態ではHBV-cccDNAからの転写が活性化することにより肝炎が再燃し、*de novo*肝炎を生じると考えられている。しかし免疫抑制によりHBV-cccDNAの再活性化がメカニズムは解明されていない。

また活動性のB型慢性肝炎においてはHBV-RNAからHBV-rcDNAへの逆転写を抑える核酸アナログが治療に用いられているが、投与により血清中のHBV-DNAが測定感度以下になっても核酸アナログの投与中止により血清HBV-DNAが再検出される。これはHBV-cccDNAからの転写活性が高いことを示しており、この点からもHBV-cccDNAには転

写活性が高い状態とほとんどない状態の少なくとも 2 つ以上の状態が存在することが示唆され、エピジェネティクスの関与が考えられる。

エピジェネティクスとは、DNA の塩基配列の変化を伴わずに遺伝子発現の調節を行う仕組みである。DNA メチル化やヒストン修飾、およびクロマチン高次構造の変化によりゲノムからの転写活性は調節されている。その中で CTCF はクロマチン高次構造を制御する key 分子とされ、様々な生命現象に関与することがわかっている。私達は肝炎肝癌誘導遺伝子の制御に CTCF が関与していることを報告した(渡邊ら、2012)。CTCF は宿主側の蛋白質であるが、ウイルス感染に関与することが近年報告され、その病態が注目されており、HBV においてもその生活環に CTCF が関与する可能性がある。また HBV-cccDNA は肝細胞核内でスーパーコイル状の高次構造を呈しており、その転写活性の調節に HBV ゲノムの高次構造が関与している可能性が示唆される。

本研究では HBV 感染可能で免疫応答が正常な感染モデルマウス(ヒト/チンパンジー肝臓置換マウス)を作成し、病態解析と治療法確立の画期的なツールを開発することを目的とする。その中で私達の担当は、作成されたキメラマウスへの HBV 感染実験系を確立すること、並びに HBV-cccDNA の解析を中心とした肝炎発症メカニズムの解析を行うことである。

## B . 研究方法

平成 24 年度、25 年度は(1)報告例を基に、作成されたキメラマウスに肝炎ウイルスを感染させるために必要な条件を具体的

に検討し、(2)キメラマウス完成後に HBV 解析に必要な実験系を確立する方針とした。さらに(3)HBV-cccDNA の制御メカニズムに関与すると思われるエピジェネティクス関連因子についての解析を行った。

## C . 研究成果

(1)マウスへの HBV 感染条件を文献的に考察した。茶山らは HBV 感染患者の血清を 5 $\mu$ L 尾静脈より静注することによりマウスへの感染をなし得たと報告している(Hepatology, 2005)。該当患者の血液中の HBV-DNA 量と併せて考察すると  $1 \times 10^5 \sim 10^6$  copy の投与で感染が成立しうると考えられた。

(2)本研究課題のキメラマウスを用いた HBV 感染による肝炎発症実験においては B 型肝炎ウイルス抗原、抗体などの各種血清学的検査、および炎症マーカーを利用して感染の成立および肝炎の発症を判定する。各々の発現は安定して定量可能になった。

(3)HBV-cccDNA からのウイルス RNA 転写の調節にはエピジェネティックな調節機構が働いている可能性がある。NCBI に記載されている HBV-DNA のゲノム配列を用いて、既知のエピジェネティック関連因子について *in silico* 解析を行った。その結果 HBV-DNA 内にはいくつかの肝特異的な転写因子の結合配列の他にエピジェネティックな調節機構の key 分子の一つである CTCF の結合が予想される配列が存在することを見出した。このことから HBV-cccDNA からの転写活性の制御に CTCF が関与していることが示唆された。さらに翻訳後修飾による CTCF の機能の変化が関与する可能性が考えられたため、蛋白 2 次元電気泳動法を用い

た翻訳後修飾の網羅的解析が可能な環境を整えた。実際 CTCF には複数の翻訳後修飾が関与しており、肝炎モデルマウス完成後すぐに HBV-cccDNA と CTCF の相互作用の解析が可能な状況である。さらに現在、CTCF 以外のエピジェネティクス因子が関連していないか解析するため、エピゲノム情報を保ったまま HBV-cccDNA を単離、解析する方法を検討中である。

#### D. 考察

(1) マウス完成後に実際に行うためのタイトレーションは必要であるが、目安となる数値は得られた。実際にマウスに投与する際には、患者プロファイルおよびゲノム情報の解析が進んでいる HBV 株より精製したウイルスを用いる。

(2) 血清学的検査は臨床検体で実際に行い既に診療に用いており、キメラマウスへの感染の判定は問題なく可能である。

(3) 同定した HBV ゲノム内の CTCF 結合配列に実際に CTCF が結合するか、ゲルシフトアッセイ (EMSA) 法、およびクロマチン免疫沈降 ChIP 法を用いて実際に HBV 内のゲノム配列と CTCF が結合するか、CTCF の翻訳

後修飾の影響があるか、などエピゲノム解析の体制を整えている。さらに HBV-DNA と宿主ゲノムとの相互作用および HBV-DNA が宿主 DNA に integrate されることによる宿主ゲノムの高次構造の変化についても解析を行う予定である。

#### E. 結論

肝炎発症実験において必要な B 型肝炎ウイルス抗原、抗体などの各種血清学的検査、および炎症マーカー等の検出系を確立した。

#### F. 健康危険情報

該当なし

#### G. 研究発表

特になし

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

##### 1. 特許取得

なし

##### 2. 実用新案登録

なし

##### 3. その他

なし